

融農學園

第2号
酪農学園発行
北海道江別市西野橋582
印刷所
凸版印刷株式会社

これからの
北海道酪農

北海道農業協同組合中央会会長

高橋雄之助



一九七〇年代は、北海道酪農の飛躍の年代であると同時に、海外乳製品との勝負の年代であり、試練の年代であるともいわれております。

このようなことがいわれる大きな原因の一つに、英国のEEC加盟交渉がこの七月頃より開

始されるとささやかれていることが上げられます。このことは遠い地球のむこう側の話ではなく、北海道酪農にも大きく影響する問題であります。現在英国では、豪州、ニュージーランド、カナダなどから大量の安い乳製品を輸入しておりますが、英国のE E C加盟が果された場合は、E E C内の非常に高い課徴金の網をかぶり、フランス、オランダ等の乳製品を使用することになりますので、大市場を失った豪州、ニュージーランド等が当然日本市場を狙って来ることは火を見るより明らかであります。

に到達しなければ日本酪農は崩潰する危機に直面しているとも言えます。この水準とは、豪州、ニュージーランド等の先進酪農国は別格としても、少なくともEEC内の酪農を凌駕するものがが必要です。しかし英国のEEC加盟は一挙に進められるものではなく、おそらく相当の期にありません。昭和四十三年十一月に農林省が発表した牛乳と乳製品の長期需給見通しによると、昭和五十二年度の需要は生乳換算八五〇万トン～九三〇万トンで、生乳生産量は八一〇万トン、従って国内自給率は九五・九％～八七・三％と予測されております。

昭和四三年の国内生乳生産量が約四〇〇万トン程度であり、すから二倍以上の生乳生産が必要であり、酪農振興は国策においても総合農政の主要な柱として位置づけられております。

ばならないと言う、きびしい時代に突入しつつある点に注目し、わが国の農業構造を高効率、高生産な体質に早急に改善しなければなりません。このためには農用地の開発、土地基盤の整備、資本整備の高度化などを通じての高生産大規模経営の確立、流通機構の近代化を促進する強力な施策が必要であります。

特に酪農については、広大な飼料基盤を持つ北海道が食糧供給の基地として国家的使命を担っていると言っても過言ではありません。しかし酪農は装置産業であると言われ、土地、施設、乳牛、機械と多額の投資を必要とするだけに、経営規模の拡大と、生産性の向上を図るためには酪農金融制度の抜本的な改善が望まれ、国有林野の開放、草地開発、ミルクロードの建設など基盤整備に対する国費の積極的な投資が必要であり、また国

際競争力を持つ酪農に育成するため、併せて、海外乳製品の輸入、抑制、価格支持制度を強化すること等も必要なことはいうまでもありません。

一方、生産者目からも経営の

酪農学園は、わが国酪農の振興期において実学習得の教育機関として建学されてから三〇数年、当初義塾から出発して機農高校、短大、大学、三愛女子高等学校、自動車学校、酪農学校と発展し、酪農に関するあらゆる部門の専門教育の場として発展され、これらの教育を受けた卒業生の方々が自ら合理的酪農経営を實踐されているのは勿論のこと、広く各界において活躍されている様子をみると、農民組織として農協運動にたずさわっている私といたしまでも、まことに喜びにたえない次第であります。

合理化を果すため、生産の組織化など、あらゆる手段を講じ、最善の努力を傾注すべきであり、この広大な北海道の大地が秘めた無限の可能性に向かって創意と工夫、そして情熱と誇り

機能を果すべく農協の組織も当然変化を求められてくると考えられます。

その変化の原因をみると

第一は全国六〇〇万農家、一四〇〇万人の農業従事者が激減すること。

第二は残った農業者でも専業農家が少数であること。

と

予言に望

A black and white photograph of a large industrial facility, likely a sugar mill, featuring several tall, cylindrical storage silos and a long, low building. The facility is situated in a rural landscape with mountains in the background.

近年、本道の酪農は大規模化と共に施設・設備に目を見張るものがある

を持って、國家的使命でもある食糧と、地北海道酪農の一日も早い実現に一層の努力を払われたいことを期待し、系統農協としても各関係団体、ならびに生産者各位と固い結束のもとに明るく、い眞の酪農郷の建設に進みたいと決意しております。

こうしたとき全国唯一の酪農専門教育の学園が神を愛し、人を愛し、土を愛する三愛主義を建学の精神として人間形成のもとに酪農教育、特に実学教育により多くの有為な酪農経営後継者を始め、関連産業技術者を送り出し、道内は勿論全国的に大きな活躍がみられておりますことは今後の酪農振興の上に期待するところ大なるものがあります。

茲に酪農学園の教育に敬意を表するとともに有為な人材の輩出を念願するものであります。

★奨学金返還に協力を
酪農育英会

本会の基金造成のために、当初十年間は毎年大口の維持会員による維持会費をお願いして、經常費はこれによってまかなってきた。基本財産は手をつけずに利殖をはかり、基金は本年三月末で、三、四七六万円に達した。これまで維持会費の納入に御厚情を頂いた雪印乳業、北農団体、農材工業、土谷長松氏に厚く感謝申し上げたい。

毎年八〇名内外、二三〇万円程度の奨学金貸与を行なっているが、この紙上をかりて、かつての奨学生であった卒業生に次ぐのことはお願いしたい。それは後輩のために、返還金未納の方は是非返還にご協力頂き、さらに一人でも多くの学生、生徒に奨学の機会を与えて頂きたいということである。

義の傾外の顧客である零細農民を組織して組合員を近代社会の一員として、その経済を合理的ならしめようとするに於つた。

地位の向上をはかるため産業組合以来六〇年余の努力をほらつてきているが、自らの力でその目的を達し得ないうちに、近代化の洗礼をうけ、資本主義は農業を自己の理論のなかに組入れようとしています。

われわれ農協としても組合員の脱皮に併せてその苦しみ悩みを自らのものとして新しい途を切り出さなければなりません。

今日まで手厚かつた行政指導も、今後はその基本態度を変へるであらうから、酪農学園の使命もこれらの情勢に対応するため益々建学の精神にのっとり、英智を集結した近代技術の習得

と豊かな精神を培い、本道農業の主軸たるべき酪農健全発展のための教育を充実強化されることを願うと共にその成果に期待して止まないものであります。

変貌する農業と酪農学園に望む

ホクレン農業協同組合連合会



で今後発展を続けてゆくことは極めて難しい事情になつて参りました。そのことは今日、農民および農協をとりまく情勢は、農業の在り方を基本的に変えようとしてゐるわが国経済の高度成長から、農業をとりまく経済を大きく変えようとしており、これによつて農民の様相が変り

第三は兼業農家という型で營業を続ける人が増加することなどが挙げられ、そのことによって農協に対する農民の要求も多実共に農協を必要とする組合員は少なくなり、兼業で農業を続けるという組合員が相当数であることが予測され、従来とはその形態を変えようとしている事実

い農業をうちたてることが強く要求されており、農業をこのように激変せしめている経済情勢は、農業や農業者及び農協をはじめまでのように特別扱いをしなくなってきたっており、同時に他産業も従来とは異った感覚で農業の分野に進出しつつあるといえますよう。

るであらうから、酪農学園の使命もこれらの情勢に対応するため益々建学の精神にのっとり、英智を集結した近代技術の習得と豊かな精神を培ひ、太道農業の主軸たるべき酪農健全発展のための教育を充実強化されることを願うと共にその成果に期待して止まないものであります。

学長就任に当って



橋本吉雄新学長

今度酪農学園大学並びに短期大学の学長を命ぜられました。現下の激動期にある大学教育の責務の重大なることを深く痛感致しておる次第で、もとより浅学微力の私ではありますが教職員一同は申すまでもなく諸先輩、本学の同窓生各位の絶大な

叙勲の榮譽に輝く両氏

川村秀雄先生

本学園副理事長

勲四等旭日小綬章受章



川村秀雄先生

先生には多年に亘り初等中等教育に努められると共に北海道教育委員及び教育委員長として地方教育行政の向上に、又北海道私学審議会委員として私学振興に偉大なる御功績を挙げられ

橋本吉雄

酪農学園大学・短大学長

酪農の中堅人物を養成せんとする使命のもとに短期大学、酪農大学を設立せられたもので三愛主義を建学の精神とせる我国唯一の酪農専門教育の大学であります。

本学も今年をもって短大第一部19期、同二部4期、大学7期で三、二二名の卒業生を社会に送り出し各地に於いて園長先生の理想の実現に努めつつありますが、本学は創立後日残く近代酪農に即応せる教育研究を徹底的に実施せんがためには、未だその設備、教育内容に於いて、不備未完成の点多々あり、後援者の皆様の格段の御援助により着々と整備されつつあります。五ヶ年整備計画の実現、老朽化する短期大学の改築、実地教育の根柢をなす農場施設の整備、設立後、日浅い獣医学科の充実教育の研究施設の充実、学生のための図書閲覧室の拡張、学生演習室の整備、又食堂の拡張、環境整備など幾多の問題をかかえており、今後なお園長先生の理想の実現のため、我国唯一の酪農教育専門の大学としての発展のために今後とも一層の御助力を賜り度く、心より厚く御願い致し、私の新任の挨拶と致す次第であります。

三愛畜産センターの夢

酪農大學卒業生

生出正実

私は昭和三十九年三月に酪農学園大学を卒業し、間もなく瀬棚町へ参りました。そして着せられた荒地を拓き今日に至りました。そこで、当農場を紹介し、酪農に対する私の考え方を少々述べさせていただきます。

農場の目標と特徴

瀬棚町は道南の檜山管内にあって、日本海に面しています。人口は六千位の小さな漁村で、農場は市街地から南東に一、五kmの地点にあり、高台地の傾斜地で、土質は火山灰を混えた壤土です。当時は柏、檜、茅、熊笹の生えた荒地でした。この土地は、農業後継者の養成と地域の酪農のモデル経営を目的とした町有地でしたが、これを無償で提供を受けたわけで、しかし、建物、道路、乳牛、資金、生活の見通しは、一切何もなかったのです。

このような条件下で、如何にして短期間にしかも最少の資金と労力で、効率の高い酪農経営を確立するか。これが所長としての私に与えられた最も大きな課題でありました。そこで、経営の単純化、集約化、省力化を目標に、次のような農場計画を樹立しました。

- (1) 完全な草地酪農型にする。
- (2) 牛舎はルーズバーン方式とする。
- (3) ジャージー種とF₁を飼養する。
- (4) 蹄耕法による草地造成を行なう。
- (5) 草地の集約的管理と利用につとめる。

総面積六〇ha(草地二五ha)乳牛五五頭(十八ヶ月以上四〇頭)牛舎七〇坪、サイロ二基、搾乳室十五、五坪、乾草庫一棟三三坪、車庫一棟十二坪、ト、

将来の目標

農場創立以来今日まで、目標に従って経営を続けて参りましたが、資金不足、労力不足、飼料不足、水不足、厳しい自然との闘い等、数えきれぬ程多くの問題にぶつかりました。しかし、それ等の難を克服し、従来地元の人達が不可能だといったこの土地に酪農経営の第一段階の基礎が出来たのでした。この事は、この地域に於ける発展の可能性を見出した重大な成果だと思っています。

今後は、更に経営の改善を図り、今後五ヶ年後には現在の三倍位に拡充する計画です。これを達成する為に、次のような改善をします。

- (1) 牛舎を改造し、ルーズバーンからフリーストールにする。
- (2) 牧草反収一〇tを目標に肥培管理を行なう。特に灌漑と液肥の施用を行なう。
- (3) 機械化による省力化を推進する。
- (4) 良質のサイレージを豊富に作る。
- (5) 牛群の改良を行ない、一頭当り産乳量を高める。

私は、今後ヨーロッパの酪農に迫るべき事を目標に、一層層努力したいと思っています。

積極的な酪農

従来、酪農は二〇〜三〇年かかって着せ地が肥沃になり、立派な酪農の基礎が出来ると言われてきた。私も酪農はそのようなものと理解して来ました。それは余りにも牛の糞尿に頼り、その肥効を過信していた結果であらうと思います。何故なら、牛の糞尿のみで土地を沃やし、

生産力のつくりの待ち、牛が殖えるのを待つ酪農であったからです。これは非常に消極的な酪農だと思っています。

農業と芸術

農業には企業的な面と芸術的な面を備えて居ると思っています。農業が企業であると言う事は当然でありますから、徹底的に利潤の追求をすべきであり、採算のとれる経営にするよう努力しなければなりません。次に、農業は芸術であると言う理由は、利潤を度外視し、新しいものを創造する創造性に於て、芸術と一致するのであります。例えば、雑木と熊笹の生えた荒地が緑のジュウタンを敷きつめたような素晴らしい草地になり、多くの牛が放牧され、赤い屋根のサイロや牛舎が建てられるなら、何んと美しい風景になるだろうかと、画家なら絵に描くでしょう。その実物を我々が作るのです。そのように新しい物を創造して行くのです。ある時には利潤を考えずに黙々と働かねばならない時もあると思っています。

農村の文化生活

職業は生産の手段であり、故に農業も生活の手段であるべきです。しかし、従来の農業は農民生活の犠牲の上に成り立っていたと云えると思います。何故なら、農繁期には何にもかも捨てて働かなければならなかったからです。やはり農業も楽しい生活の手段になるべきだと思っています。最近農村の生活水準が高くなり、農村文化も高まったと云われますが、確かにその通りだと思っています。しかし、これで良いとは思いません。何故なら、それは単なる都市文化の模倣に過ぎないからです。農民は多く都会人並みの生活を望んでいるようですが、しかし私は農民は都会人には真似もできないような素晴らしい生活をすべきであらうと思っています。

農民教育

最後に農民教育について述べたいと思いますが、従来は農業教育はなされたが農民教育は余り徹底されていなかったように思われます。何故なら、余りにも技術偏重の教育であったからです。今後の農民教育は基礎教育を中心とし、更に精神教育を加えた人格教育が必要であると思っています。そこで、私の農場では冬期五ヶ月間農村の青年を対象として、デンマークの国民高等学校式の学校を作る計画です。今年五月までには、その校舎が多々の方々の御協力により完成する予定です。この教育の目的は、自分のことだけではなくお互いに助け合って農村を守り、国の内外の情勢を知り、臨機応変に経営を変えて行ける自主的な農民を養成する事にあります。この農民教育を経済的に支えることの出来る農場にする為に、日夜努力を続けているのです。皆様の多くの御協力を心から感謝しています。今後一層の御指導御鞭撻を御願い申し上げます。

自昭和五十五年九月十五日	小学校 訓導
自昭和五十二年三月十四日	北海道庁立十勝農業学校教諭
自昭和四十六年三月二十五日	北海道庁立十勝農業学校校長
自昭和四十六年三月二十五日	高等官五等を以て待遇
自昭和四十六年三月二十五日	正六位
自昭和四十六年三月二十五日	願に依り本職を免ずる
自昭和四十六年三月二十五日	北海道庁立十勝農業学校校長
自昭和四十六年三月二十五日	興農義塾野幌農学校校長
自昭和四十六年三月二十五日	学校法人酪農学園理事
自昭和四十六年三月二十五日	学校法人酪農学園常務理事
自昭和四十六年三月二十五日	学制改革に伴い野幌農学校校長
自昭和四十六年三月二十五日	野幌高等酪農学校校長



二瓶栄吾氏

二瓶栄吾氏

本学園園監事

勲五等双光旭日章受賞

- 特別役職
- 自昭和五十五年四月六日 至昭和五十五年四月十八日 学校法人酪農学園専務理事
 - 自昭和五十四年四月十九日 至昭和五十四年四月十八日 学校法人酪農学園常務理事
 - 自昭和五十四年四月十九日 至昭和五十四年四月十八日 学校法人酪農学園副理事長
 - 自昭和五十四年四月十九日 至昭和五十四年四月十八日 酪農学園短期大学酪農学校校長
- 在任
- 自昭和五十二年六月十五日 至昭和五十二年六月十五日 北海道社会教育委員
 - 自昭和五十二年六月十五日 至昭和五十二年六月十五日 北海道教育委員
 - 自昭和五十二年六月十五日 至昭和五十二年六月十五日 北海道教育委員長就任
 - 自昭和五十二年六月十五日 至昭和五十二年六月十五日 北海道私学審議会委員
- 在任
- 自昭和五十二年六月十五日 至昭和五十二年六月十五日 文部大臣から産業教育功労者として表彰を受く

同氏は北海道議会議員、農業協同組合その他農業関係諸団体役員に重責を担って御活躍され、殊に地方自治の発展に御尽力された御功績として四月二十九日天皇誕生の佳日に叙勲されました。学園一同衷心からお慶び申し上げます。

同氏は本学園の教育に深い御理解を寄せられて昭和二十一年以来本学園の監事として学園教育の振興に多大の御尽力をされておられますことに対して深く謝している次第であります。

根釧開拓に義塾精神を

酪農義塾卒業生 森 謙 造

私も若い若いと思つて居る内に五十を過ぎる年になった。振り返つてみると、今は亡き父に伴われ、この地に入植以來四〇年にもなり、今でこそ根釧地帯は主要なる酪農地帯となつて来たが、昭和四年の入植當時は、道の營農方針は穀類農業であり豆類、麦、ビートが主作物であつた。

父は道の指導方針に疑問を抱いて、入植直後四頭、二年目三頭の搾乳牛を導入した。當時茶内には集乳所がなかったため、根室の西和田に原料乳を汽車で送り、脱脂乳も汽車で送り返してもらい、子牛を育てた。

當時の思い出として、脱脂乳は温めると固るので、手でほぐして子牛に飲ませたことである。それは酸敗していたからである。

當時牧草は開墾補助の対象作物でないため、これには困つたらしいが父はどんな牧草を蒔付して行つたので、支庁の係官を散々悩ませる処となった。

然し、父は頑として支庁の指示に従わぬままに乳牛を殖して行つたが、昭和六年六月三十日に大降霜に見舞われ、牧草以外の農作物は全滅した。続く七年も夏季低温多雨、加えて濃霧襲来が烈しく、稀に見る大冷害となつた。

入植者は食うに食なく、着るに衣なく、皇室を始めとし官民一致の同情の義援物資の贈与を受けた。しかし、この窮状に耐え切れず、約半数の農民は意気そう失して内地に引揚げて行つた。

ここに於て、道庁も従来の方針をいっしゅうし、時の長官佐上信一氏は根釧原野に八割補助乳牛の制度を実施したのである。こうして、禍は転じて根釧原野にもようやく生きる道が見出されたのであるが、これには根釧酪農史に永久に書き残すべき重大な事がある。

それは、北海道の開拓即ち北方文化の建設には酪農によらねばならぬと信じて、根釧の二年にわたる冷害を機会に、道庁に對して従来の營農方針の転換を具申した一団の人々が居たことである。その人々は雪印乳業の先身である酪連会長宇都宮仙太郎、専務理事黒沢西蔵、外各理事監事全員であつて、「北海道農業革新に関する建白書」がそれである。

こうして乳牛が導入され、根釧の各地に酪連の集乳所が開設され、草を乳に換える方途が見出された。亡き深沢吉平先生の、いわゆる食糧貴化である。

更に酪連の首脳者は、次代を背負う農業後継者教育の必要なことに着眼し、昭和九年に北海道酪農義塾を開設し、これが現在の酪農学園の前身となつたのである。

私は、昭和十一年三期生として酪農科に学ぶ事が出来得たのであるが、今にして非常に幸であつたことを心から感謝している。



酪農義塾々長は黒沢西蔵先生自ら当中曾根、野河先生が舎監で、流汗惜道晴耕雨読のスパルタ式教育であつた。当時外遊された中曾根先生からは、デンマーク農業の実態が逐一報ぜられ、私共のよき指針となつて今も経営中に生きています。

折しも野先生が種牡牛に突かれ入院された。野先生にかわつて酪農経営の権威である鈴木重光先生が舎監となられたのであつたが、先生独特の酪農経営技術を習得出来たことを感謝している。

さて、本道の酪農を考へて見ると、明治の末期から大正の十年頃迄はケブロンや、ダン等によるいわば大規模官營農場の方式であつたが、一農家としての農法いわゆる現在の酪農経営は、大正十年頃以降デンマークを主とした北歐式のものであるといつてもよからう。このデンマーク農法が導入された由来については、宇都宮仙太郎翁と黒沢西蔵先生を抜きにしては語る事は不可能である。

宇都宮翁が、大正十三年三月に畜牛実研会主催によるデンマーク派遣留学生帰国報告会に於て「余は何故にデンマーク農業を推奨せしや」という挨拶の中で、「今を去る十八年前、ウィスコンシン大学に於て時の総長ヘンリー博士の、大学を去るに當つて州の農民を前にして、今後学すべきはデンマーク農業なりと声涙共に下る講演を聞いたためである」ということである。宇都宮氏は帰国後女婿出納の一をとしてつづきにデンマークを視察させ、デンマーク農業についての自信を深め時の長官宮尾舜治氏に建言して先の留学生の派遣となり、又二人のデンマーク農家の招へいとなつたのである。

こうして根釧の酪農も日と共に進み、私も酪農を学んで家に

、経営を担当したのであるが、昭和十二三年には乳牛二十五頭となり、茶内に於ては始めての地上サイロを建てた。それは地下六尺地上二十四尺内径十二尺の曲物型木造サイロで、始めて自製のサイレージを造り、その香りに感激の余り義塾の青山永先生に手紙を書いた。「それが酪農のだいご味である」と先生からの返信ではげまされたことは今も忘れ得ない。

然し、天は時を私に与えず、十五年三月現役兵として旭川七師団に入營した。入隊三年で除隊。直に青年学校の軍事訓練に専念、更に終戦の春再び応召、年末に除隊していよいよ酪農に専念することが出来た。

除隊して見ると戦につかれた経営は成牛僅かに七八頭。それは老父母が基礎牛としてやつと守つて居てくれたものである。次いで海軍に徴集されて居た弟も帰宅、力を合せて開墾作業や暗渠排水工事等をして耕地を拡大、やがて土地に乳牛建物を付けて弟を分家をさせた。

當時私の経営は、義塾で学んだデンマーク農法の直輸入であつた。家畜ビート、ルタバカ、デントコーンと飼料作物中心であつた。

その頃、酪農研の全道的結成が行なわれ、私も率先して参加し、釧路地区連盟を同志と共に

随筆



想い出などというものは、過ぎ去つた日の中に遺して来た、墓標のようなものでしょう。喜びを刻み、悲しみを刻み、幾山河をよるめきよめき、やうと現時点へたどりついた足跡のしるしなのです。が、そのすべてが、甘美なつかしさをもつて胸に迫るのには、不思議なことす。過去は美化される、と言われるゆえんでしょう。

吹きさらしの野原に丸太棒が二本立つて、目をこらしてよく見ると、その一本には、風雨ににじんだ墨文字で、「興義塾野幌機農学校」と書かれてあり「ああ、これが校門であつたのか」と、うそ寒い思いで感心



現在の食事時の光景からは、もはや當時を偲べない

晩年を過したのであつた。常に「天に逆らうな」といつた父は、適地適作の信念を通した。又時に自作の「生不知死亦不知身天有而権威高貴重なる人生再来一路天街進して止」と吟じて居た。

父は、渡道以來一徹一徹の時代から、トラクター農業を見て逝つたのであるから、満足して永眠したと思う。

それから十有余年、七〇年代となつて私の経営も乳牛五十頭を越え、今後数年にして五十頭搾乳が可能となるまでに漕ぎつけた。

北海道の酪農はどこまで進み

うるか、それは私にもわからない事ながら、少なくとも世界の酪農に伍して進まねばならないし、又進み得ると思う。この時に考えることは、余りにも日本経済が高度成長を遂げ、今後も止まる事をしない現状では、之について行く経営を開発しなければならなくなつて来たといふことである。それは、ソ連式でもアメリカ式でもない方式が必要だと思ふのである。そのためには巨大な資本が必要であり、旧来にとらわれないアイデアが必要である。今しばらくは模索の時代であらうが、やがては必ずやその姿を現わすために奮闘を要する。

わが青春の墓標



前井 礼二

ら、堆肥運びをしたモッコの重かつたこと——目の前が暗くなるほど腹を空かして、食堂の木の椅子に皆なと並んで食べた、イモメシのうまかつたこと、そして、無情なほどにその量が少なかったこと——夜な夜な上級生に呼び出されて、制裁の犠牲に合う仲間を見ては、恐

管が埋められ、泥んこ道には炭ガラが敷かれ、二寮、三寮、四寮、五寮と、寮の建築が進められたのでした。どれもこれも、「俺達の血と汗がこめられていく」という感慨があります。

西野幌以前の、義塾時代の前身については私には判りませんが、西野幌以後ですと二十余年が過ぎ、かつての機農学校は、学校法人酪農学園という、日本唯一の酪農教育の殿堂にまで発展しています。

私たちの、青春の墓標が立ち並ぶ丘の上には、原始林を背景

にして、四年制大学、短大、機農高校の校舎がそびえ、林業試験場の坂道を下りた辺には、三愛女子高校までが設置されて、オーバーに表現するのなら、乙女等の声が満ち満ちているようです。その昔、オカッパ頭の、少女の給仕さん、にまで青春のときめきを覚えた、欲求不満時代のOBである私などには、なんともうらやましい限りです。

しかし今更、むかしむかしの追憶といつてみても、それは決して昔ではなく、僅々二十年の瞬時の光芒にすぎないやうで、酪農学園も、漸くこれから成年期を迎える段階に至つた、ということだろうと思ひます。

学園の卒業生も、七千余に達したそうで、こんな折に「学園便り」が発刊されるといふことは、本当に嬉しいことです。

それぞれが、青春の一時期を埋めたあのときが、現在の道をふんまえる礎になつていくやうに、西野幌五八二番地からの便りは、これから私たちが歩む道の阿側に、美しい連帯感の花を咲かせるものと思ひます。

原始林の丘に建立した、わが青春の墓標を私はどこへも移転できそうにありません。(機農学校二期生)

酪農学園の使命

[その一]



黒沢西蔵酪農学園長

酪農学園園長 黒沢西蔵

酪農学園は普通の学校や大学と違います。普通の農学校や農科大学とも違います。私はこのことをよく知ってもらいたいと思つて、この小冊子をみなさんに読んでもらつてもう一つで出しました。

この学園の敷地をみなさんご覧下さい。この広さは日本一です。教室に入るためには必ず農場や牛舎のそばを通りますね。見かけでこの学園の特徴を自慢するつもりは少しもありませんが、この風景のなかにだつて、学園の建学の精神はしっかりと生きています。

酪農学園は私が創立しました。あれは昭和八年ですから、もう三十七年になります。当時は酪農義塾という名前でした。しかし、私にだつてこんな大きな学園をつくる私財なんかありませんでした。いまでも財産なんかありません。ではどうして出来たのか。今日はこの話をあつたままに、あからさまに、赤裸々にしてみよう。これを一口にいうと、酪農の浄財でできた学園だということです。

この小冊子を読めば判ることですが、雪印乳業とその前身の酪連一興農公社そして農協団体が酪農教育の必要性、重要性を骨身にしみ感じて、育て上げてきたのがこの酪農学園なんです。普通の私立学校や大学なら卒業生は実業界や政界にどんと

進出していい顔役になつてくれます。そして母校にはどつきり寄付もしてくれまふ。けれども酪農学園の卒業生はまた農村へ帰り、自ら土と取り組む人々が多いのですからそんな金持にはなれません。しかし、北海道にはもう五十年以上も前から、本物の農業をやるにはデンマークを理想にしなければならぬ、それにはデンマークのよう

に本物の農業をやる農民、それも技術だけではなくて頭も心もつばな農民を育てなければいけない、という考え方がありました。

雪印だつてこの考え方を正しと信じ込んだ酪農の同志がつくったものです。ですから、酪農学園は、米麦中心の日本農業の体質を根本から改めようとする運動、すなわち協同主義に基づいた組合運動が広がるなかから誕生したものだといえるんです。世界一流の酪農王国をこの日本につくろうと決心した酪農家が若い腕と心のしつかりした指導者を育てようとしてつくった学園なんです。

よくいわれる背広農民とか、農村に寄生するやうな人間を育てる学校ではありません。このことは学園の歴史を知れば、よく理解してもらえらると思ひます。

さて、本論に入る前にほんの僅か、農業に対する私の考え方を話しておきます。一体、わが国の産業は明治以来目覚しく発達しました。まさに日の出の勢いです。しかし、農業はだめです。大いに反省しなければなりません。どうも発達が遅いのです。なぜでしょう。これは農業の宿命でしょうか。私はそうは

決まっています。農業だつて科学の力を十分応用し、農民の努力が十分みのるような仕組み、方法をとれば必ず繁栄するものなのです。

また、私はこんな信念を持っています。農業をないがしろにする国や、土地を粗末にする農業は必ず滅びる、と。

農業を土台にして、その上にりつぱな工業を築き、商業や貿易を盛んにするのでなければ、その国の繁栄は絶対に永続するものではないと。これは世界史にちやんとするされてい

る。証明されていることです。例えばいまから二三百年前です。そのころの世界の一等国はオランダ、スペイン、ベルギーでした。彼等は商売上手でしたから世界を股にかけて、活躍していました。しかし、彼等の繁栄はただ貿易に頼るだけでしたから永続していませんよ。

その次に世界に君臨したのはイギリスです。鉄と石炭を基礎として商工業の発達をはかり、やはり貿易によってインドやインドネシアから莫大な富を吸収して王座につきました。しかし、今日のイギリスはどうでしょう。いまイギリス人は国内の農業をかえりみなかった時代のことを深く反省してくやんで

いるではありませんか。その後世界をリードしたアメリカは大農業国ですよ。ソ連も農業の振興に大いに力を入れて伸びてきました。ですから私は、日本も農業という産業の土台をしっかりと固め、その上に工業、商業の繁栄を図っていく必要がある。そうしなければ日本の繁栄は永続しないと信じてい

ます。では一体、どのような農業を日本に育てるべきなのでしょう。わが国の農業は米と果樹の農業として築いてはきました。が、すでに米だけが食糧であるという時代は終わりました。動物性の蛋白と脂肪の生産が必要な時代となったんです。乳肉を生産する酪農はこれからの農業です。一体、欧米人の体格はどうしてあんなに偉大なのでしょう。これは単なる人種的素質や遺伝に依るだけではありません。

彼らには日本人よりも遙かに充実した食物があるからです。その中心が牛乳・卵・肉なんです。しかも食物のいかんは頭脳にも影響します。したがって、わが国で酪農を發展させることはわが国民の人種改造という重大な事業に深くかわりがあるのです。

また、酪農は単純な穀作経営や無畜農業には不可能な国土づくりを使命とする重要な農業です。農業は穀物や実をとるものだと日本人は長い間信じ込んできました。土地をつくる、国土を豊かにするということをはつきり意識した農業はありませんでした。農業を続ければ土地は荒れるものだと思つてきました。水田も古くれば水がわき、秋落ちするのが当たりまえでした。畑は作物がとれなくなるまで使うというやり方でした。

しかし、今私達が志している農業は酪農です。この農業は世界でただ一つ、続けられ続けるほど土地をこやし、作物も家畜も良く育つ農業なんです。家畜のふんや尿は土地のなかで土地やす役目してくれるバク

テリアのエサになるのです。草の根もそうです。ただ忠実に基本を守っていけば必ず土地がよくなる、りつぱになる、そういう農業は酪農だけです。水田では地力が落ちてくると山や川から土を運んで入れなければならぬが、酪農は自家生産物でやれるのです。酪農にはこのように国土を豊かにするという案外気づかれていない重要な役割があるのです。この酪農をさらに盛んにするために有為な人材を農村へ送り出すのが本学園の使命にほかなりません。

そこで私は、改めて、どのような考えでこの学園ができたのか。私はどうしてこの学園を創立したのかという根本の話をしてみたいと思います。一体酪農学園の建学の精神は何であるのか、この学園が実学を重んずるというのはどうゆうことなのか。

私の思い出

私は茨城の水戸の在で、いま常陸太田市に生まれている世矢村で明治十八年三月に生まれました。本当にその日その日の生活にも困る小百姓という小作の小伴です。その当時の日本の学校制度は、義務教育四年制という時代ですから、村には四年制の尋常小学校しかありません。

だから私もここを卒業してそれきりなんです。そのあとはどうしたかというところ、隣の家にいた漢学の達者な人のところへ暇々に行つて手ほどきを受け、さらに涯水(がいがい)義塾という漢学塾へ二年ほど通いました。

いったいに茨城は理屈が多いところですが、私の生まれたところは水戸光圀侯、水戸黄門が「大日本史」を編さんしたところとして有名な西山郷から一里ほど離れたところなんです。い

わば水戸学の総本山ともいふべきところなんです。藤田東湖の学園で、明治維新に大きな影響を与えた学風がしみこんでいたのです。明治維新の大政奉還の水戸学があつて

か、ということにも触れてみましょう。私は一生のうち六十五年間というものの、デンマークという国を憧れ、何とか北海道を東洋のデンマークにしたいものだとか、この夢を実現しようとして一生懸命で努力してきたのであります。ですから、では一体なぜそんなにデンマーク崇拝者になったのか、デンマークのどこがそんなに気に入ったのかということも話してみたいと思つています。

そこで、私は学園創立者の黒沢西蔵をマナ板にのせてみます。そうして酪農学園三十有年の歴史をあるがままに、これもソソにのせて解剖してみよう。ウソ偽りのない赤裸々なところを別の黒沢西蔵が刀を取つて解剖してみようというわけ

です。青雲の志をいだいて上京するというのがよくいわれますが、明治時代の若い者はみな「末は大将か大臣に」という夢をもっていました。私もその一人です。海軍兵学校をねらいました。資格とか学歴とかはややましく問わない、試験さえ通ればよいという時代でした。十五

才のときに受験してみると、体格で、はねられてしまいました。食うや食わずでやっていたものだから目方が足りない、それに私は小柄です。仕方がないから来年もう一回受けようと考えて勉強に励んでいました。ちょうどそんなところへ、明治時代としてはたまた一つの社会問題であつた足尾銅毒事件が起きたわけです。田中正造という人が、国会議員を辞めて、明治天皇に直訴を行なったという事件があつて、いっぺんに世人の関心と同情、義憤を集めました。直訴事件は東京市中の新聞に全面をうめて報道されました。

私はそれを見てえらく感動しました。いまだきこうゆう偉人がいるのか、と思つてびっくりしたんです。純情な子供心で感激した衝動から、田中先生を尋ねました。満十六才のときです。明治三十四年十二月十四日に直訴いたしましたからその直後です。新橋の越中屋という三流宿に行つて、会いたいという

と、田中さんは「まあ上がれ」と。会つてみると新聞などでみるのと大違いで実にいいおじさんでした。私にじゅんじゅんと銅毒問題のてん末を聞かせてく

れました。そして先生がいろいろ「話だけでは判らんだらうから一度現地をみたらいいだらう」といふのです。ちやうどいま内村鑑三とか島田三郎、木下尚江という人達が發起して、学生の視察団を募集している、あと一週間もすれば出かける、それに加わつていくように、という

ことです。そこで私もその視察団に加わり、内村鑑三先生に率いられて視察に出かけました。東大からは河上肇、早稲田からは永井柳太郎などが来ていました。この視察団には東京中の中学校も高校も大学も全部参加しています。学生だけでも千五百、千六百人はいました。なるほど行つてみるとひどい。まず古河で降り海老瀬村や谷中村もみました。竹ヤブに入ると、あの地震にもびくともしない根がすつかり銅毒のために腐つていて、私如き小男が抜いてもポツポツ抜けてしまふ。どこへ行つてもそうでした。それだけではないんです。田んぼの中、畑の中に毒塚が累々とありました。洪水がくると泥がたまると、それが銅毒で、緑青が生えた泥ですから、それを農民がつかつかき集めて、これをです。内村先生はこの毒塚の上から大演説をしてくださいました。学生はもうみな興奮しました。血わき肉おどるというのはあのときです。私も非常に憤慨しました。

視察のコースは一日でした。私はここだけでは足りないので、もつと奥までみようと、友人と一週間ばかり渡良瀬川の沿岸をみて歩きました。全く至るところ大同小異なんです。沿岸何十里という間は可愛相なものでした。百姓は作物はとれない、食うには困る、病氣にはなる、という惨たんなる光景を見ました。よくもまあこんなひどいことを問題にしないもんだなあ、と純真な学生としては、本

ともだと思ひました。帰るとすぐ、学生救済会が東京にできました。私も負けず路傍演説をやりました。衣類や米や金を集めて被害地へ送りました。大きな運動でした。東京の新聞社も団体もみな応援してくれました。これが恐らく日本の学生運動のはじまりではないでしょうか。ところが、そのうちに政府の干渉が強くなり、文部大臣は学校長に命令を出して、そんなことをやらせてはいかん、学生は勉強すべきだということです。なにしろ明治時代ですから政府や大臣の権限は強い大きな力がありましたから、このため、いつとはなしに学生の数が減ってしまひ、とうとう五、六人になつてしまひました。そのうちに私は考えました。なるほど救済運動も一時的な助けになるかも知れん、しかし根本の解決をはかる、根本を片づけなければダメではないか。これはやっぱり鉱毒被害地の農民自身、とくに

私の思想形成と田中先生

その当時、日本は富国強兵に夢我夢中の時代です。軍国主義の時代です。日清戦争に勝ち誇り、これから日露戦争になろうかといふころですから、日本としては銅という資源はどうして必要です。足尾銅山は大きな産地ですから、銅は容易で、また、まだ科学技術の幼稚な時代ですから、製錬したあとの毒物の処理も十分にやらないわけではあります。そこで沿岸の住民は苦しんで、銅山の仕事はど

ろ、田中先生は「富国は結構だ、強兵も国を守る強兵ならよい、だが、他を侵略する強兵では侵略される方も迷惑するじやない

青年が奮起して政府に迫らんきやダメだと考えたわけだ。そこで私は田中先生にこの話をしました。すると先生は「そりゃその通りだ、あなたのいうとおりだ」というのです。そこでひとつこれから鉱毒地へ乗り込んで、青年を糾合してこの運動を起そうと思ひ、といつたら、「そりゃいい考えだ」というのです。このあたりが例の水戸学の知行合一、さつそく村々を歩き回り、五千人ほどの団体をつくり、相愛会と名づけた。私が十七、八才のときです。

とにかくこちらはいやにさつとたたかまらんといいわけだ。徹底的にやりました。そこでだんだん当局の目に余るといふことになつたのでしよう。これは弾圧しなければならぬといふことになつて、館林の警察につかまり、とうとう前橋監獄へほうり込まれてしまひました。あそこ

たりしてしまふことはとんでもない、といふんです。田中先生は「これは何億年たつても生きているんだ。われわれ人類が生きてゐるのは国土があるからじやないのか。その国土を、一寸の土地でも粗末にするといふ考



三愛精神こそ酪農学園建学の礎となった。

私の酪農経歴

が、とうとう読んでしまつた。そのうちにだんだん判つてきた、少しづつ興味も出てきた、というわけだ。また、裁判の方は未決としてしばらくがまんしていると今村力三郎さんという長野県飯田出身の弁護士が担当してくれました。この人は鉱毒事件の弁護のために判事を辞めて弁護士になつた方で、のちに日本法曹界の大立物になつた日本一の弁護士です。この人が、「君の弁護は私が引き受けるから安心してやいなさい」、激励してくれました。裁判はいろいろいきさつはありましたが、もともと罪はな

ところ、私が二十才のとき、私の母が死んだのです。私は非常に悲しかった。すぐ郷里へ帰りました。私の下に妹と弟が一人ずつあつたんですが、これを引きとつて世話をする必要がありました。父はおりました。が、恥をいいますと、酒飲みでどうしようもないんです。小原庄助さんの組ですから、私に弟妹を一人前にする責任ができたのです。

とにかく一人立ちして、自分で食べる人間にならなければなら

なさい」といふやうなわけだ。翌日さつそく宇都宮牧場に入りました。ときに明治三十八年八月一日です。いうならば、私の酪農元年です。それ以来今日まで、とにかく酪農ひとすじで生きてきました。最初のうちはつらかつたのなんの、三ヶ月か四ヶ月のあいだは夜寝ると体がビリビリ痛んで寝返りも容易じゃなかつたほどです。一番最初の仕事は牛の糞出しでしたが、朝は一番早く起きてがんばりました。三十分か一時間ほど早く起きて、カマドに火をつけたり、酪農の本を読んだりして勉強しました。翌明治三十九年の十二月になつた。私はいきなり第一の役人に頭を下げた。東京の鉱毒運動のときなどで、さんざん警察にいじめられたり、牢屋へほうり込まれたりしてから、役人は徹底的にいやなんです。また、商人になつても、人につかわれて心にもないウソをいわなきやダメだが、牛を飼つたり、作物を育てるのにごまかしをやつたり、おべんちゃらを

第三に牛乳は人間の体をよくする、牛乳をやれば赤ん坊は育つし、一般の人も健康になる、病人もよくなるということです。今から六十年も前のことですが、まだ栄養などという概念は考えない時代です。ただ腹一杯になればよい、米が食糧だと思つていた時代です。そのときに日本人の体をよくするために牛乳を飲む、牛肉を食べなければならぬ、だから牛飼いは百姓は日本人に役に立つ仕事だといふ話です。

私はいくつか聞いていて「これだ、これは一生をかけてやる仕事だ。私の一生を酪農に捧げるべきだ」といふべに決心しました。そこでさつそく、「先生、私を弟子にして下さい。使つて下さい」と頼みました。すると先生はすぐ、「ああ、いつでも来

酪農学園発行の月刊酪農誌（全国版）

— 創刊二三年！近代酪農は全国の酪農家のみなさんと共に歩んできました。



酪農学園短期大学酪農学校／江別市西野幌582／TEL 江別2-2543
年間講読料2,000円／A4判・72頁